



「言語の脳科学」研究会

継続課題研究

- 1) 「言語の脳科学—言語獲得と障害の脳理論を目指して—」
(1997年度開始、1999年度末終了)
- 2) 「科学の文化的基底」
(1998年度開始、1999年度末終了)
- 3) 「生物研究と生命—生物学の統合化と生命概念形成への寄与—」
(1998年度開始、2000年度末終了)
- 4) 「環境と食糧生産の調和に関する研究—人類生存の視野から—」
(1998年度開始、2000年度末終了)

新規課題研究

- 5) 「臨床哲学の可能性—生命環境の諸問題を軸として—」

趣旨・概要

「臨床哲学 (clinical philosophy)」とは、現実社会の具体的場面で生じる哲学的な治療を必要とする問題を、自らも「医者」ではなく「患者」の一人として考えていこうとする新しい哲学的活動を指している。

本課題研究では、この臨床哲学を取り上げ、従来の哲学のようなアカデミズムの内部で抽象的な「一般的原理」の探求を目指すのではなく、具体的な「個別事例」から出発することによって既成の原理を揺さぶり、新たな概念の思考スタイルを紡ぎ出すことを試みることを目的とする。

クローン人間、脳死、遺伝子食料、公的介護、生殖技術等の「生命環境」をめぐる問題に焦点を絞って取り組む計画である。具体的には、次の課題に関するサブグループによって、研究内容の具体化と問題意識の深化を図る。1) 「臨床哲学」の方法論、2) 「生命環境」の文化政治学、3) 「生命操作」の倫理学、4) 「共生」の思想。

研究代表者:野家啓一企画委員・東北大学文学部教授。

研究期間:1999年4月～2002年3月



「環境と食糧生産の調和に関する研究」シンポジウム

6) 「物質研究における多角的協力の構築」

趣旨・概要

現在、物質科学及びその関連諸分野においては、多くの研究プロジェクトが進められているが、それぞれ初期の目的に応じた人員構成になっており、新しい発展を目指すときの他のグループとの協力の手がかりが少ない場合が多くある。

本課題研究は、研究プロジェクトを横断する企画をたて、異分野を繋ぐ新しい協力関係を作り、次の新しい発展の出発点を構築することを目的とする。

取り組む当面の計画の目標と主題は、1) 目標: 工学と物質科学の新しい接点の模索、主題: 物質科学の発展に基づく光・電子システムインテグレーション、2) 目標: 計算科学を通じての化学と物理の融合、主題: 触媒作用の原子プロセス等、3) 目標: 物質開発と理論物理の協力、主題: 遷移金属酸化物等の強相関電子系の相変化、4) 目標: 物質開発に関わる数理の建設、主題: 合金系の原子配列の基礎数理。

研究代表者: 金森順次郎・大阪大学名誉教授

研究期間: 1999年4月～2002年3月

(2) 準備研究

1999年度(平成11年度)の準備研究では、研究期間を延長する2課題と新規の5課題の計7件とした。

1) 「政府統治(government governance)の研究」

—現代日本政府の統治構造—

研究代表者: 本間正明 大阪大学経済学部教授

2) 「ヒト遺伝子解析及び遺伝子医療に伴う倫理問題とそれへの対応」

研究代表者: 武部 啓 近畿大学原子力研究所教授

3) 「感性情報の特徴パターンと情動反応の関連性について」

—音楽の美しい音の特徴物理量パターンと、これに対応する脳の情動生理反応の関連性について—

研究代表者: 安藤由典 東京大学名誉教授

4) 「次世代ソフトウェアの調査研究」

研究代表者: 大野 豊 企画委員・京都大学名誉教授

5) 「我ら体細胞にとって生殖細胞とは何か?」

—何故、そして如何にして、我々は自らの生存には不必要な生殖細胞を作るのか?—

研究代表者: 岡田益吉 企画委員・筑波大学名誉教授



「科学の文化的基底」研究会



高等研の庭で歓談する、左から松原副所長、京極フェロー、一人おいて翠川フェロー

6) 「『一つの世界』の成立とその条件」

—鎖国時代の日本とヨーロッパ—

研究代表者:中川久定 京都大学名誉教授

7) 「東南アジアにおける地球環境変動に関する国際共同研究の態勢」

—途上国との研究協力長期発展の立場から—

研究代表者:加藤 進 京都大学名誉教授

「2」学者村の展開—「招へい学者 (IIAS Fellow)」の充実—

永年の宿願であった学者村の実現に向けて、招へい学者 (IIAS Fellow) の一層の充実を図る。1999年度 (平成11年度) には、特に海外研究者の招へいに重点を置き、学術の国際交流の充実を期することになっている。

「3」 「特別研究員制度」ならびに「研究員制度」による若手研究者の育成

1996年度 (平成8年度) に設けた優秀な若手研究者の研究を奨励するために研究奨励金を支給する「特別研究員」制度に加え、1999年度 (平成11年度) より特別研究の研究事業に大学院後期博士課程修了者 (資格: PD) を参加させ、研究の進展を促進するとともに、若手研究者の育成を図ることを目的とする「研究員」制度を新設した。

1999年度 (平成11年度) は、特別研究員2名と研究員2名を採用した。



1999年度新規特別研究員にヒヤリングを行う正副所長

「4」情報出版事業の推進—インターネット出版への展開—

今後の情報通信基盤の高度化を踏まえ、情報出版事業においては、インターネット出版の具体化を図るなど、事業の電子化を推進するものである。具体的には、研究成果の情報を電子化することにより高等研のサーバーに蓄積してデータベースを構築し、外部からのアクセスがあればオンラインで学術情報を提供しようとする試みである。

これは、高等研で進められている特別研究「情報市場における近未来の法モデル」において、その中心課題として取り扱う著作権取引市場モデルである「コピーマート」の研究を推進する中で構想が固まったものである。学術的な研究と、それを支える電子情報を扱う技術の開発、情報流通のための制度を含むシステムの構築をとおして、近未来における新たな情報出版事業の創出に期待するものである。

理念は「何を研究するかを研究すること。関西文化学術研究都市にある国際高等研研究所が今年、開設十五周年を迎える。アジアで唯一のユニークな基礎研究所だが、研究以外のマネジメントを切り盛りするのが専務理事の仕事。新宮康男理事長に請われて、昨年四月就任した。旧松下電器貿易社長、松下電器産業常務、専務を歴任した国際

テーブルトーク

国際高等研究所専務理事 関 淳さん(67)



開設15周年を迎え
ファン層拡大に力

派ビジネスマン。関西経済連合会常任理事など財界人としての顔も持つ。「ビジネス界で、成果を数字で表す生活をしてきたので別世界に来たようだった。研究所のベースは人、地球、宇宙。人間が生きていくため、幸せになるための議論、研究に数字の目標はたてられない」

「森嶋通夫さん(ロンドン大名誉教授)は去年秋、夫と関西空港から直接、研究所に来た。講演などを通して大きな刺激を与え、帰国する時ここから関空になった。いつまでも著名な研究者がいるようにしたい。研究所の当初の構想を定着させ、膨らませていくことが任務と心得ている。(七尾 隆太)

いま進行中の課題研究は「人類の自己家畜化現象と現代文明」環境と食糧生産の調和に関する研究—人類生存の視野から—など六プロジェクト。

「大学や企業では取り上げにくい根源的なテーマばかり。研究会をのぞくと、企業人としての意見を求められることもあってね」と、研究所生活を楽しんでいるようだ。理事長からは「外から顔の見える研究所にしてほしい」といわれた。「民間企業百五十社強が基金を出し合ってきたのに、あまり知られていないから」

国内外の優れた研究者を招いて約二カ月間、研究所の宿舍に滞在してもらった「フェロイ(招へい学者)制度」にも力を入れる。フェロイは自分の研究のほか、研究者との交流やセミナーなどの講師を務めてもらう。九八年度は八人。

「研究会をのぞくと、企業人としての意見を求められることもあってね」と、研究所生活を楽しんでいるようだ。理事長からは「外から顔の見える研究所にしてほしい」といわれた。「民間企業百五十社強が基金を出し合ってきたのに、あまり知られていないから」

国際高等研究所は1984年財団法人として設立されて以来、試行錯誤を繰り返しながら創設の理念の実現を目指して努力を重ねてきた。自然科学・人文科学を区別することなく各方面から招かれた研究者は研究所のあるべき姿を構想し、何を研究すべきかを論じた。そうした中から高等研は人類の幸福と将来を見据えた課題を選定して研究を推進してきた。その間に生まれた幾多の研究者グループが高等研の力となり、その知的資産を創り上げてきた。

1993年に完成した高等研の研究施設はその創設の理念にふさわしい絶好の研究環境であり、内外の研究者にとり知的刺激に満ちた学問的対話の場となっている。

この15年間に新しい研究分野の生成発展、研究予算、研究体制等をめぐり内外の学術研究環境は大きく変化している。わが国でも学術研究に対して重点的であるが大規模な資金が投入されるようになった。それとともに大学の研究成果の公表とその評価が厳しく求められている。高等研は財団法人であって大学や国立の研究機関と同列に考える必要はないが、変動する学術研究環境の中でこそ優れた研究者の協力をえて内外の動向を先取りするような研究を推進し、内外の厳しい評価に応えるような研究成果を発表して社会の要請に応えなければならない。

さらに、グローバルな国際環境における政策決定をめぐる学際的対話、研究者と産業界や官界との研究交流、さらには社会とのコミュニケーションを通して、高等研が知的な創造の場として外から見えるように努めることも検討課題である。

(1) 準備研究と課題研究

現在、高等研はその中心となる研究活動として骨太い課題研究を6件程度選定し、原則として3年の期間で研究を進めている。その選定にあたっては企画委員を通じて提案されたものからまず10件程度を準備研究として選定し1年間の研究を実施した後、

毎年2件程度を課題研究に選定している。準備研究も課題研究もともに企画委員会での評価検討を経て所長会議で決定している。

現在、準備研究として『一つの世界』の成立とその条件」「我ら体細胞にとって生殖細胞とは何か」等7件が進行中であり、課題研究には「科学の文化的基底」「物質研究における多角的協力の構築」等6件がある。これらの研究は文部省科学研究費補助金「特定奨励費」によって実施されている。

(2) 特別研究

高等研の課題研究を中心とした研究活動に加えて、大型の研究予算と5年相当の期間による特別研究の推進は、高等研の発展を大きく支えるものと考えている。現在既に、日本学術振興会「未来開拓学術研究推進事業」として「情報市場における近未来の法モデル」が5年計画で1998年4月に発足している。また、科学技術振興事業団「戦略的基礎研究推進事業」として「器官形成に関するゲノム情報の解読」を同じく5年間の予定で1998年12月に発足している。

これらの特別研究への高等研の対応は、今後一段とその重要性を増すものと信じてる。

(3) 「学者村構想」の充実

学術分野の多様化・多角化が進み、優れた成果を求める競争は、研究者を一段と多忙にしている。既存の学術分野を強く押し進めるためにも、また既存の学問分野に捉らわれない研究分野を開拓するためにも、研究者の間で学問全体を語り合う必要が痛感されている。高等研は分野を異にする先駆的研究者を「高等研招へい学者」(IIAS Fellow)として招き、時間に縛られない研究環境を提供し、相互の交流や後進に対する啓発を促進する場となることを期待している。

また、特別研究の各部門総括責任者のように高等研にとり重要な研究を推進する研究者を「高等研招へい研究者」(IIAS Researcher)として受け

入れて高等研における研究の便宜をはかっている。

(4) 若手研究者の育成

若手研究者の育成のために国は博士研究員一万人計画を着々として進めている。高等研は限られた経費ではあるがその課題研究や特別研究に協力する者を高等研研究員に採用して若手研究者の育成に心がけている。学者村構想に見られる高等研独自の研究環境は若手研究者にとり他の研究機関と比べることができないユニークなものである。

(5) 産・官・学の研究協力の場

産・官・学の協力の必要性が叫ばれて久しい。大学においてもこの三者が共同して優れた研究成果をあげることは必ずしも容易ではない。その要となるのは、三者のコミュニケーションの場があることである。高等研はこうした要請に応える最適の研究機関であると自負している。京都大学数理解析研究所や宇宙開発事業団との共同研究、課題研究として行なわれている物質研究の中での「未来型電子材料」の議論、さらに特別研究で育ちつつある共同研究組織は、それぞれ内容も目的も異なるが、高等研にふさわしいタイプの共同研究体制が実現しつつある例である。

(6) 研究成果の公表と出版

高等研はすでに準備研究、課題研究、特別研究等の研究成果を知的資産として蓄積している。また高等研が主体となって開催した講演会や公開シンポジウム等もその重要な研究成果である。研究成果の中には、直ちに公表して世に成果を問うべき提言から人類の生存、社会、文化に関わる問題、あるいは生命や人間を深く考えさせる問題等多岐に亘るものが含まれている。また歳月とともにその価値が見出されるような各種研究資料がある。さらには広く啓蒙・教育に資するものもある。

そのように結実してきた多様な研究成果はわれわ

れの誇りである。しかし創設の理念に照らすならば、そうした諸成果はその理念の実現に向けてわれわれが歩みつつあることの一証左にすぎないであろう。高等研にはまだまだ研究機関として解決しなければならない課題が山積している。

そうであるだけにその研究成果を高等研がその名で世に問うことが求められている。それが、固定した研究者を擁しない研究機関である高等研の責務である。われわれは限られた予算の枠内でそれを果たすことが求められている。しかも高等研の多種多様な研究は広範囲に及ぶものでありやがてその成果は膨大な量となることが見込まれる。そうしたことを考慮してわれわれは研究成果をインターネット上で発表することになっている(<<http://www.ias.or.jp>>)。高等研のホーム・ページに高等研の研究成果が発表される。この電子出版に加えてさらに創設15周年記念事業の一環として「高等研選書」を毎年数点刊行する予定である。これはオンデマンド方式の電子出版である。さらに高等研学術叢書の刊行も進める予定である。

このように高等研は高度情報社会の研究機関として多様な形でその研究情報ないし研究成果を発表して、高等研の姿とその研究が多くの人々の目に触れるように努力していきたい。

高等研は恵まれた研究環境に囲まれている。多くの研究者が人類の未来と幸福のために論じ、研究者相互の理解と親睦を深め、ときには他では得られないなにかを感じ、発見することができる場がそこにある。それだけに高等研の存在には重い意味がある。

われわれは、創設15周年を迎えて、初心に帰りその創設に貢献された産・官・学の諸先達の高邁な志と学問への献身に思いをいたし、その深遠な創設の理念を実現するため、内外の研究者、企業、行政の協力の下に、持続した歩みをさらに続ける所存である。

所長 沢田敏男

副所長 井口洋夫・北川善太郎・松原謙一